日本SPF豚協会だより
Report of JAPAN SPF Swine Association 2008.7 第32号

提◆言

一陣の風

ホクレン滝川スワイン・ステーション 場長 大久保 真

ホクレン滝川スワイン・ステーションは、北海道で初めてのＳＰＦ管理による道固有の系統豚（ハマナスＷ１）の維持増殖施設として平成３年に滝川市にて開設、その後ＳＰＦコマーシャル農場の増加とともにＦ１母豚の生産がメインとなり、平成８年に規模拡大を行いました。現在は、生産者各位のさらなる需要に応えるべく同市の江部乙町に新種豚場を建設し、来年２月よりＦ１母豚の供給が開始される予定となっており、年間1,000頭の供給能力が倍増することになります。また、新しい系統豚の維持増殖のほかデュロック雄豚の増殖も手がけ、種豚場としての機能はレベルアップします。

スワイン・ステーションは農場が２ヵ所になったため、新しい種豚場を「種豚センター」、現農場を「養豚技術センター」と命名、この１年をかけて種豚生産機能を徐々に移行する計画です。ささやかな農地も取得し、養豚技術センターにおける自給飼料の可能性の模索など業務の幅もより広がることになります。

豚も働く人も増えて新たなステージに向かい現場は活気に満ちていますが、一方では飼料をはじめとする生産資材の価格高騰も大きな関心事となっています。養豚はもちろん世界を取り巻く情勢は急激に様変わりし、多くの方々にお世話になった新スワイン・ステーションの船出も順風満帆とは言えなくなりました。石油・穀物市場への投機資金流入、バイオエタノールの需要増加、アジアの経済発展、異常気象などが絡み合い、物質的に豊かな生活をもたらした輸入品は今、厳しい現実を日本社会にも突き付けています。

もちろん、私たちはこの状況に立ち向かい、消費者の方々の変わらぬ信頼を得ながら、それぞれの立場でコストダウンと生産性の向上を図り、この荒波を乗り切っていかなくてはなりません。一方で、この第３次オイルショックとでも呼ぶべき状況に対し、自国の食料はできるだけ自国の生産で賄うというあるべき姿に立ち返るため、生産物の再生産可能な価格帯への誘導や、より有効な国策も求めていく必要があります。

さて、話は変わりますが、今回の新しい種豚場のオープンのため７名を新たに採用しました。その中に高校新卒の女性が２名います。養豚の現場に女性が進出という話題は業界ではもう当たり前のようになっていますが、当農場も遅ればせながら大きな（？）決断をしました。女性採用の目的は、広く言うと養豚という職場における男女雇用の機会均等の実践ですが、当農場的には分娩・子豚に対するきめ細やかな対応への期待、そして良い意味での「一陣の風」です。採用にあたっては、まず近隣の農業高校に出向いて進路指導の先生に相談、かなり厳しいと思いますよというお返事だったのですが、先生の予想に反し２名が立候補、厳しい面接を経てみごと採用となりました。ただし、農業高校出身といっても豚に接するのは２名とも生まれて初めてです。研修を兼ねた勤務は養豚技術センターで行うことになり、Ｙ教育指導担当官のもと初日より耳刻・犬歯の処置・断尾を断行、始めは心身ともに疲れ果てた様子でしたが、良き先輩たちのフォローもあり音を上げることなく２ヶ月の研修期間を終了、近々戦力として種豚センターで活躍することになっています。期待した一陣の風も吹いたようで場内の雰囲気も変わり、近い将来に北海道の養豚業界に大きく貢献をしてくれるものと、共に働く者として期待をしています。

前段で述べたように大変厳しいご時世ですが、新スワイン・ステーションの取り組みも皆さんに一陣の風と感じ取ってもらえるよう、頑張っていきたいと思っています。

定時総会において事業計画など承認
合わせて日本養豚学会「養豚功労賞」受賞祝賀会を開催

去る6月11日（水）、東京都千代田区のＫＫＲホテル東京（東京共済会館）において定時社員（代議員）総会が開催されました。19年度の事業経過および決算報告などが承認され、また今年度の事業計画についても承認を得ました（会員の皆さまには議案および議事録をすでにお送りしてあります）。
また、総会終了後には、前号でもご報告した赤池協会会長の日本養豚学会「第2回養豚功労賞」受賞を祝う会が開催されました。遠路お越しいただいた方を始め90名を超えるご参加をいただきました。

平成19年度事業経過報告

協会事業の柱であるＳＰＦ豚農場認定制度において、会員およびピラッミドの認定担当者の間に、認定に対する温度差が目立つようになってきたため、再度意識統一を図るべく、認定基準の見直しと認定業務の厳正化に取り組みました。認定農場数は185（GGP、GP農場19、CM農場166）で、飼養母豚数は、防疫設備・管理基準見直しや豚舎火災等の影響で認定申請を見送った農場があったため、71,726頭となりました。

18年度は生産成績に僅かながら下降傾向がみられましたが、19年度はほぼ横ばいで推移しました。

引き続き地域研修会を、盛岡、札幌、熊本の３か所で開催しました。どの会場も盛況で、農場管理者とのコミニュケーションがはかれたことは、大きい収穫でした。他の地域（関東、中四国）については継続事業となっております。

ＳＰＦポークのＰＲのため，リーフレットを２種配布いたしました。また、認定農場従業員の意識向上に役立ててもらうため、新たに協会オリジナルキャップとＴシャツを作成、全認定農場に見本を送付、販売も開始しました。

協会だよりは予定通り27号、28号、29号、30号を発行いたしました。あわせて、協会ホームページの充実を図り、内容チェック、更新回数を増やしました。

また、11月に開催した交流会で、生産成績最優秀ＣＭ農場の表彰制度をスタートさせました。

さらに、平成21年秋の協会創立40周年に向け、記念事業の準備をスタートさせました。その一環として記念出版物を刊行することとなり、本のタイトル、内容等について検討を開始しました。

平成20年度事業計画

防疫設備基準、防疫管理基準の徹底

両基準が実際に効果的に実行されているかどうか、認定申請時に平面図、写真添付と診断表の記載徹底を確実に実行していきます。

認定委員会の開催

ＳＰＦ豚農場認定事業を推進していきます。認定委員会は例年どおり、6、9、12、3月の計4回開催します。

認定委員会の独立性の強化

認定委員会の独立性と権限強化を図るべく、法人化も視野に入れながら、引き続き検討していきます。

認定成績集計結果のフィードバック

引き続きＳＰＦ豚農場認定申請にともなって提出される生産成績を集計して、その結果をそれぞれの会員（当該農場以外は匿名）にフィードバックします。会員の意見や反応をみながら、さらに充実したフィードバックの方法がないか模索を続けるとともに、地域研修会等を通じてより充実したものにしていきます。

生産成績優秀ＣＭ農場の表彰制度の継続

生産成績優秀ＣＭ農場を選考委員会により選定、セミナーで表彰します。

地域研修会の継続

昨年度からの継続事業として『養豚農場における防疫対策の重要性』をテーマとした地域研修会を開催します。具体的には、昨年度実施できなかった東関東地区（千葉・茨城：於潮来）、西関東地区（栃木・埼玉・群馬：於高崎）、近畿・中四国地区（於岡山)を７月に実施いたします。

上記テーマの研修会が一巡したあと、新しいテーマを設定して、秋口から地域研修会をスタートさせます。

セミナーの開催

一昨年度、昨年度と実施した交流会について、セミナーを復活してほしいとの要望が強く、講演会を主としたセミナーに変えたいと思います。10月28日の開催を予定しております。ＳＰＦポークの試食会を兼ねた懇親会は今年度も開催します。

協会だよりの発行

31号、32号、33号、34号を発行します。

販促用資材の制作と普及

過去２年で制作した店頭用ポークリーフレット２種を引き続き希望会員に無料で配布いたします。さらに、認定農場向け協会オリジナルキャップとＴシャツを販売継続いたします。

協会創立40周年記念事業企画の推進

平成21年秋の協会創立40周年記念事業のための企画を進めております。

その一環として、ＳＰＦ豚に関するテキストを出版します。日本ＳＰＦ豚研究会との共同出版を予定しております。

ＳＰＦ豚肉に対する正しい知識の普及

昨今、食の安全に対する関心の高まりに乗じて、必要以上にＳＰＦポークの安全性を誇張した文言が食肉流通業界で目に付くようになっていますが、日本ＳＰＦ豚協会としては、すべての会員が一致協力してあらゆる機会をとらえ、ＳＰＦ養豚の仕組みと生産情報がわかるような正しい「ＳＰＦポークに関する知識の普及」に努めます。

その他

ＳＰＦ養豚の普及と生産されたＳＰＦポークの販売促進に即応できる協会をめざし会員の努力を結集することに努めます。

総会終了後、午後６時30分より赤池洋二・協会会長の日本養豚学会「第２回養豚功労賞」祝賀会が開催され、総勢91名にお集りいただきました。

まず、山本孝史・東京農業大学教授より、養豚功労賞の趣旨説明と受賞理由についてご説明いただいた後、会長から「本来ならば、一番最後にお礼の挨拶をすべきところですが、この賞は、私個人の功績ではなく、ＳＰＦ養豚にかかわりのあった生産者、研究者、技術者の方々全員の努力の結晶であり、私が代表していただいたにすぎない。ともに喜びを分かち合いたいと思います」と挨拶がありました。

続いて、波岡茂郎・北海道大学名誉教授（協会ＳＰＦ豚農場認定委員会委員）より、心のこもった祝辞をいただき、南波利昭・(社)中央畜産会専務理事の乾杯の音頭で開宴となりました。

会場には、おなじみのＳＰＦポークのしゃぶしゃぶや、認定農場産豚肉原料の本格手づくりハム・ソーセージも用意され、大変好評でした。

最後は柏崎守・協会ＳＰＦ豚農場認定委員会認定委員長による万歳三唱でお開きとなりました。

この日駆け付けていただいた、北は北海道から南は九州の生産者の方々、またこの会のためだけに上京していただいた方が何人もおられました。

会場が一杯になるほどのご参加をいただき盛り上がった祝賀会（上）
挨拶する赤池会長（左下）　功労賞の賞状と副賞のブロンズ（右下）

賞の祝賀会としては少し変わった会であったかもしれません。個人を祝うのではなく、関係者全員で喜びたいという、受賞から一貫して変わらぬ会長の思いが、このような形となりました。参加者の皆さんにもその思いは伝わったのではないでしょうか。和やかな、心温まる会になったとのお言葉をいただきました。ご参加いただいた皆さま、誠にありがとうございました。

連載
豚の細菌病③

豚胸膜肺炎

東京農業大学教授　山本　孝史

豚の胸膜肺炎は、Actinobacillus pleuropneumoniaeによる線維素性胸膜肺炎を主徴とする疾病で、かつては豚萎縮性鼻炎、マイコプラズマ肺炎とともに豚の三大呼吸器病といわれていました。豚萎縮性鼻炎やマイコプラズマ肺炎が慢性経過をたどり、致死率はきわめて低いのに対し、本病は急性発症例では高い致死率を示します。本菌には15の血清型があります。

臨床症状と病変：本菌に感染した豚は、免疫の程度、衛生環境、感染菌量といった要因に応じて、甚急性、急性、亜急性あるいは慢性の臨床経過をとります。

甚急性型～急性型では、突然元気がなくなり、食欲が廃絶して横臥し、体温は40.5～41.5℃に上昇し、脈拍数は著しく増加します。下痢、嘔吐が短時間認められることが多く、発症の初期には呼吸器症状は目立ちませんが、そのうち開口、腹式呼吸となってイキが荒くなり、鼻腔および口より血液の混じった泡沫状の分泌物が出ます。1～3日の経過で斃死する場合と、亜急性から慢性型に移行する場合に分かれます。初めて本病が発生した豚群（特にＳＰＦ豚群）では、流産が認められることもあります。幼若豚では敗血症となることがありますが、この場合は臨床症状なしに死亡します。亜急性～慢性型は、急性型に耐過したあと認められ、痰が絡んだような咳をして食欲は減退し、その結果発育不良となります。このような慢性型の臨床症状を示す豚群では、不顕性感染豚が多数存在してこれらが新たな感染源となります。

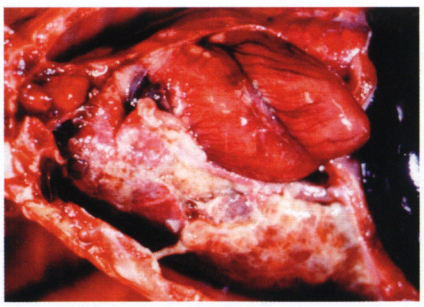


写真1　急性型の病変

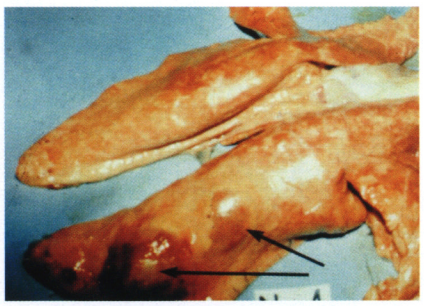


写真2　慢性型の病変

病変はほとんど胸腔に限られています。甚急性あるいは急性死亡例では、胸腔に血液の混じった胸水が貯留し、肺胸膜は壁側胸膜と線維素で癒着し、肺葉は著しい充出血と肝変化がみられます（写真1）。耐過した慢性例では、主として横隔膜葉にウズラ～鶏卵大の結節が認められます（写真2、矢印の部分）。この結節は厚い結合織で覆われ、内部は膿が溜まっている場合や壊死になっている場合など様々です。

予防と治療：本菌に対しては、ペニシリンおよびセファロスポリン系薬剤、チアンフェニコール、テトラサイクリン系薬剤、ニューキノロン系薬剤、さらにはサルファ剤やオリメトプリム等が有効です。本菌の薬剤感受性には血清型により差があり、２型以外の血清型は２型よりも耐性化し易い傾向があります。特に１型は同一薬剤を投与し続けると容易に耐性を獲得するので、ときどき菌分離を実施して薬剤感受性を調べるようにします。本病は薬剤による治療によく反応しますが、臨床症状が認められたら可能な限り早期に治療を開始することが大切です。急性発症豚では食欲が廃絶しており、嘔吐も認められるので注射により投与します。また、発症豚だけでなく、無症状でも、同一豚群の豚全頭に注射するようにします。

本病はワクチンにより発症予防は可能ですが、感染を防ぐことはできません。同様にワクチンを接種した母豚から生まれた子豚には、初乳を介して発症を予防する免疫が賦与されますが、感染は予防できません。また菌体ワクチンによる免疫は概ね各血清型に特異的であり、交差免疫は成立しません。しかし1990年代になって、多くの血清型に共通な細胞毒や外膜タンパクを成分とするワクチンが開発されました。そしてこれらの成分のみのワクチンや、これらと菌体とを混合したワクチンは、菌体のみのワクチンより有効で交差防禦もある程度期待できるようになりました。

本病にひとたび侵された養豚場では、病原体が常在化し、新しい豚を導入するたびに発症を繰り返します。このような豚群では、空いた豚舎の消毒を徹底して行い、新規導入豚にはワクチン接種を励行するとともに、薬剤添加飼料を投与して感染の遮断に努めます。その際オールイン・オールアウトや隔離早期離乳法を組み合わせれば順次清浄化して行くことも可能です。

ト◆ピ◆ッ◆ク◆ス

新ＧＰ農場が相次ぎ完成、祝賀会を開催

全農畜産サービスピラミッド・ホクレンピラミッド

全農畜産サービスピラミッドが昨年より建設を進めてきた秋田県の「由利本荘ＳＰＦ豚センター」が完成、去る６月６日に竣工祝賀会を執り行いました。

まず現地事務所前で神事を行い、その後場所を由利本荘市内に移しての祝賀会には、地元関係者をはじめ100名を超える関係者が出席しました。

峯苫稔三・同社社長の施主挨拶に始まり、感謝状贈呈、来賓祝辞、祝電披露のあと、鏡割りを行いました。お酒はもちろん地元の名酒、由利正宗です。

祝宴中にはこの日のために作成した、ハイコープＳＰＦ豚事業およびセンター施設紹介のＤＶＤが上映され、箏と尺八の合奏演奏も行われました。尺八の演奏は、都山流尺八竹琳軒大師範吉田修宇山こと吉田修作・同社常務取締役（協会副会長）が行いました。「春の海」や秋田民謡「生保内（おぼない）節」などが演奏され、会場は大いに盛り上がりました。

同センターは、平成19年７月に造成工事着工、同10月に畜舎建設工事着工、今年４月末に完工しました。

飼養母豚規模は常時1,000頭。フル稼働時で年間6,700頭のＳＰＦ種豚出荷を目指しています。全農畜産サービスピラミッドとしては、東日本原種豚場、西日本原種豚場、秋田ＳＰＦ豚センターに次ぐ、４番目の直営種豚場となります。

事業総面積は約40ha、施設用地は約６ha。施設の特徴としては、特に環境対策、防臭対策に配慮し、最新のふん尿処理システムを採用するとともに、堆肥舎だけでなく、全豚舎に全農型のミスト消臭システムを装備しています。

三方を山に囲まれており、さらに来客対応室や出荷施設、飼料中継所など外部との接触が避けられない施設については、畜舎から離れた場所に設置するなど、防疫的には理想的な配置となっています。

６月12日には、ホクレンピラミッドのＧＰ農場「ホクレン滝川スワイン・ステーション種豚センター」の落成祝賀式が、農場のある滝川市にて執り行われました。

参加者は60名、祝賀会に先立ち、施設見学会を実施、防疫上、場外からバスに乗車しての見学を行った後、祝賀会会場となった「滝川ふれ愛の里」へと移動しました。

枳穀勝久・ホクレン代表理事副会長の施主代表挨拶、来賓祝辞、感謝状贈呈および謝辞の後、見学会で見ることのできなかった同センターの内部施設紹介がありました。

同センターは昨年10月より建設開始、今年３月に施設が完成しました。総事業面積約15ha、飼養母豚規模は常時480頭で、来年2月からの年間2, 400頭の種豚供給を目指しています（本号の提言参照）。

また、自給飼料生産を検討するのための試験圃場も確保、畜産飼料を取り巻く厳しい環境を打破するための、北海道ならではの新たな道も模索しています。

滝川市は、菜種の生産量が日本一。祝賀会でも北海道空知支庁長、滝川市長、たきかわ農協組合長の挨拶の中、「空知地区の農業王国復建に、ぜひ貢献を」「菜種に次いで養豚で日本一に」などとといった言葉が相次ぎ、同センターに対する地元の強い期待が随所に感じられました。

最後に、赤池洋二協会会長の「北海道の認定農場の実力は、世界トップクラスのデンマークに匹敵するものがある」との言葉に続いて万歳三唱、新たな門出を力強く後押ししました。

紹介●ＳＰＦのお店⑤

とんかつ武信 武信分店

川崎市多摩区南生田4-12-5 TEL.044-976-0477
http://take-shin.net

渋谷区西原3-1-7TEL.03-3466-1125
http://take-shin.net/bunten

小売店を中心にご紹介してきたこのコーナー、今号はとんかつメインの飲食店が登場です。

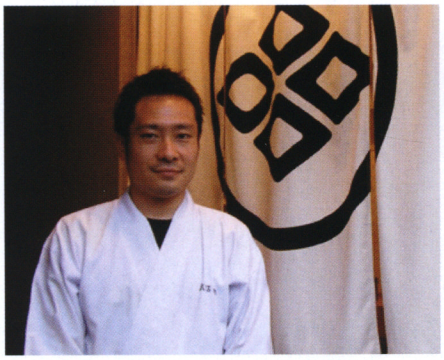
神奈川県川崎市生田の住宅街にある「とんかつ武信」。地元で知らない人はいないと評判のとんかつ専門店です。定食はもちろん、会食などにぴったりの個室も備え、出前にも力を入れています。

社長の武田悦夫さんは、東京でも指折りのとんかつ専門店で修行した後、昭和49年、この地に店を構えました。以来30年以上、地域密着で順調な経営を続けています。武田さんがいつも心がけているのは「本物をお客さんに提供すること」。調理に使用する水はすべて、地下のタンクで備長炭を使ってろ過した電子チャージ水、お米は有機無農薬と素材にこだわっています。

そんな武田さんの厳しい目にとまったのが、千葉県の認定農場がつくるグループ「林商店肉豚出荷組合」産のＳＰＦポーク。いろんな肉を試していた時にたまたま出会ったそうです。「食べればすぐわかる。あくが出ないし、角煮でも違いが出ます」。とんかつがメインだけにヒレとロースに特化した注文ながら、田谷ミートセンター（千葉県）の努力で必要な量を揃えてもらっているとのことでした。

武田さんのこだわりと技術を受け継ぎつつ、オリジナリティを追求したのが長男和也さんが営む「武信分店」。代々木上原という瀟洒な街で「定食を召し上がる方にも、お酒を飲みながらゆっくりくつろぐ方にも満足してもらえる雰囲気のお店を」と、オリジナルメニューを充実させ２年前にオープンしました。こだわりの米油で揚げたとんかつはもたれにくく、おつまみとしても好評で「ＳＰＦポークはあっさりしていてあくも出ない。月に３～４回みえるお客さんもいます」。

武田悦夫さん


武田和也さん

協会への要望を伺うと、「ＳＰＦ豚って何？とよく聞かれます。もう少しわかりやすいといいですね。せっかく生産者の方が努力されているのだから、その価値が伝わるためにもＳＰＦの認知度が上がるようにしてほしい。それが店の価値にもつながりますから」。長年の課題に対して貴重なご意見をいただきました。

●協会からのお知らせ●

●代議員の交代

関東地区の代議員（定員７名）の矢吹和人氏が退任されました（後任は空席のまま）。また、組織内人事の異動にともない、中部・甲信越地区の代議員（定員2名）の峰村善樹氏（長野県農協直販㈱ＳＰＦ種豚センター）に代わり依田繁二氏（同）が、松田宇一郎氏（㈱マルス農場）に代わり杉山房雄氏（同）がそれぞれ就任されました。

●理事の交代

全農畜産サービスピラミッドの吉田修作理事（副会長）に代わり峯苦稔三氏が就任され、副会長となりました。また、シムコピラミッドの高橋吉男理事に代わり、渋谷清昭氏が就任されました。

●認定委員の交代

日本農産工業ピラミッドの認定委員が尾関紳一氏から櫻井忠氏に交代しました。

●ピラミッドの名称変更

日本ハイポーピラミッドの社名がプライフーズ㈱ハイポーカンパニーと変更されました。協会内のピラミッド名呼称は、ハイポーピラミッドといたします。

かんたん、おししい　いのこ家林シェフおすすめ、ＳＰＦポークレシピ

ＳＰＦキムチビビンバ

レシピ提供：いのこ家社長・総料理長　林　勝

夏に向かってスタミナをつけたい時期ですね。今号は唐辛子の辛さが食欲をそそるコリアンメニュー、ビビンバを教えていただきました。野菜もたっぷりとれて栄養バランスもよい一品です。辛さはお好みで調節して下さい。

材料（4人前）

ＳＰＦ豚ひき肉　400g
ご飯　4人分
卵　4個
ホウレンソウ　1束　　もやし　1袋　　わらび水煮　300g
人参菜　1束　　人参　2分の1本　　たまねぎ　2分の1個
キムチの素　30g
コチュジャン　40g
針唐辛子　少々
ごま油
塩
黒胡椒

つくり方

① ホウレンソウともやしを軽くボイルし冷水にとって冷やし水気を切っておきます。
② ①とわらびの水煮を別々にごま油、塩、胡椒で味付けしておきます。
③ 卵を68℃で17分ゆでて温泉卵をつくります。
④ 人参とたまねぎを千切りして人参菜と和えて水でさらします。
⑤ ひき肉をフライパンで炒め、胡椒、キムチの素、コチジャンを加えます。
⑥ どんぶりにご飯を入れ肉と⑤をのせ、真ん中に温泉卵をのせます。一番上に水気を切った④をのせ、針唐辛子を飾ります。
よくかき混ぜで召し上がって下さい。

【林シェフのひとこと】
お肉は強火で炒めないようにしましょう。せっかくのＳＰＦポークのやわらかさが損なわれます。

●認定情報●

●平成20年度認定農場

[6月認定]（有効期間：平成20年6月6日から21年6月30日まで）

北海道・㈲鈴木ビビッドファーム、青木ピッグファーム、㈲ゲズント農場、**青森県**・カワケンＳＰＦファーム、同第三農場、**岩手県**・ＦＶファーム、**秋田県**・㈱ナカショク八竜繁殖農場、同大口繁殖農場、同能代離乳農場、**山形県**・㈱ナカショク庄内繁殖農場、同庄内肥育農場、**福島県**・㈱フリーデン都路牧場、㈲東和牧場、**茨城県**・㈲奥田農場、㈲弓野畜産繁殖農場、同八郷農場、同千代田農場、㈲篠崎畜産、**栃木県**・㈱ノイバーン、**群馬県**・㈲タカハシファーム碓氷高原農場、**千葉県**・石毛宏司養豚、岡野朝雄養豚場、高橋幸雄養豚、塚本利昭養豚場、宮沢光男養豚場、㈲アグリ、吉田道養豚場、㈲藤崎農場、江波戸ＳＰＦ農場、㈲下山農場第二農場、**新潟県**・外川畜産興業、㈱ナカショク荒川繁殖農場、同中条離乳農場、同下田肥育農場、同長峰肥育農場、同上中山肥育農場、**兵庫県**・(農)八鹿畜産河上農場、同小田垣農場、**鳥取県**・西日本ジェイエイ畜産㈱名和農場、**岡山県**・㈲荒戸山エスピーエフファーム、**愛媛県**・冨永養豚場、清昇養豚場、旭養豚場、㈲多田ファーム、**長崎県**・ＪＡ全農長崎県本部五島種豚供給センター、㈲伊藤ファーム、浜田養豚、**宮崎県**・㈲レクスト、㈲ナガトモ、江夏商事㈱川南農場、同御池農場、クリーンファーム㈱、**鹿児島県**・㈱かいたく大口農場、同牛鼻肥育センター、同鶴川内農場、鹿児島いずみ畜産㈱三笠農場　（以上56農場）

※次回認定委員会は平成20年9月11日（木）の予定

SPFのひと

㈱ユキザワ大川農場
久保　義宏さん
●愛媛県大洲市

ＳＰＦ豚として最高峰の成績を目指して

㈱ユキザワ大川農場は、高速松山道大洲ＩＣより車で約30分、清流肱川の標高約150mの山間部にあります。大洲市は四国ながら盆地ということもあり、寒暖差が激しく、冬は道路が凍結、雪が積もることも珍しくありません。大川農場は、ＳＰＦ豚の先駆けとして、1984年に母豚200頭一貫経営による開放式豚舎の農場を立ち上げました。1992年には、既存の開放式豚舎を繁殖舎～離乳舎に利用する改築とウィンドレス肥育豚舎の増築で現在の450頭に増頭しました。

久保さんは農場立ち上げ当初から24年間、農場長を務められている大ベテランです。就任前は、約８年間地元飼料販売会社の営業マンとして、養豚農家を相手に飼料・畜産農機具の販売から生産管理指導まで取り組みました。立ち上げ当初は前職の経験も活かされ、商品化頭数24頭を達成し、順風満帆に思えた養豚経営でしたが、その後は苦労の連続でした。

最も苦労したことは２つ、１つは人材の育成です。従業員は堆肥管理のパートを含め６人で日常管理を行っていますが、休暇時の管理や不測の事態に備え、従業員全員が各担当を持ちながらも、全てのセクション業務が行なえるよう教育する必要があったからです。

もう１つの苦労は、問題点に対して改善策を見出す事です。点と点の日常観察でなく、一連の流れで日々の管理状況や豚舎と気候との上手な付き合い方を理解し、一歩二歩先の状況変化を読む大変さ。なかなか思うようにいかず、苦労したそうです。その後、2005年度には再び商品化頭数24頭を達成しました。良好な生産成績を維持達成する秘訣は、「①各セクションが情報を共有すること②各セクション担当者が垣根を越えて日常的に（朝・夕）ディスカッションを実施し、管理へ反映させること」の２つだそうです。つまり、従業員全員が各セクション業務を行える事で、１つのセクションに対して、さまざまな角度で問題点や改善策を話し合える環境が出来上がったということです。

今後の目標についてお聞きすると、「土地柄、規模拡大は難しいため、現状の規模でＳＰＦ豚として最高峰の技術成績を目指しながらも、近年の飼料高に対して、成績を落とさないようコストダウンに努め、地元に愛される農場であり続けたい」とのことでした。日々のディスカッションにより、各担当者がお互いに切磋琢磨して、管理技術が向上している㈱ユキザワ大川農場が最高峰の成績を達成し、全国的に有名になる日は近いかもしれません。（伊藤忠飼料㈱　本門　浩司）

編集後記

東北地方の地震で被害のあった方々に改めてお見舞い申し上げます。一日も早い復興を願っております。
6月には新しいＧＰ農場の竣工を祝う式が相次ぎました。わが国の農業、畜産を取り巻く環境は厳しさばかりが目立ちますが、その中でＳＰＦ養豚の健闘ぶりは注目に値するのではないでしょうか。
相次ぐ食品偽装問題には目を覆いたくなるばかりです。期待と信頼を損ねることのないよう、協会としても認定事業推進にあたり、常に襟を正していきたいと思っています。皆様のご協力をお願いいたします。（ｋ）

日本ＳＰＦ豚協会認定農場産シール

このマークは
有限責任中間法人
日本SPF豚協会の
登録商標です

日本SPF豚協会だより
第32号　2008年7月1日発行（季刊）
発　行　有限責任中間法人 日本ＳＰＦ豚協会
〒101-0032　東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375　FAX.03-5835-5376
e-mail：j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/
発行人　赤池　洋二
編集人　林　　哲